
焰

あや/小町

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焰

【Nコード】

N2743I

【作者名】

あや／小町

【あらすじ】

「聖葉女子学園」シリーズ4本目。

妃穂と晶、二人の少女の物語。そう思っこのシリーズを書いていますが、妃穂の従者である茨木を筆頭に、彼女達のまわりにはさまざまなキャラクターがいます。

きりゆう・そのこ

桐生園子は旧家の出身であり、初等部からここにいるという、妃穂とまったく同じ立場の同級生。似たもの同士だから惹かれあい仲良くなるかという、必ずしもそういうわけでもないようです。

妃穂と犬猿の仲である園子は、退学届けを提出する。

誰にも止められないとわかった時、園子の友人達が頼みにしたのは晶だった。

ここでは異質なくらい、明るく伸び伸びとした転校生尾崎晶。

「10年待てばもう充分でしょう」

「それまでは、あたしがいるじゃない」

- 月の光の中、誰もいない図書室で少女たちは語る。

「あたしに言えばどんなことでもなんとかなるって思っ
てないか、あんたたちは」

眉間に浅くしわを刻んで言うのは高等部一年生の尾崎晶。

上流家庭のわけあり子女がほとんどを占めるこの全寮制の学校で、
晶は自らの意思でここへ入ってきた、一種変り種の生徒だ。

今年の四月に入学してまだ三ヶ月しか経っていないというのに、彼
女は早くもここに馴染んでいる。

言われた三人は黙って互いに顔を見合わせ、決まり悪そうに首をす
くめた。

晶はほとんど指先で机を叩きながら言う。

「自分たちが言いづらいことは全部あたしに押し付ければいいとで
も思ってたんの？」

「そんなこと！」

三人のうちの一人が勢いよく顔をあげて真剣に否定した。

「そんなことありません、本当に」

できるだけの説得はしたのだと一人が言い、他の二人もうなずいた。
だが晶の眉間のしわは消えない。

桐生園子と特に親しい同級生三人が晶たちの部屋をそつと訪れたの
は夜9時。

深刻な頼みごとをするのには適当な時間だった。

園子が聖葉をやめて実家に帰ろうとしている、それをなんとか思いとどまらせてくれというのが彼女たちの頼みごとで、はじめのうちは三人も、晶と同室である妃穂と茨木が存在を気にしていたのだが、そのうち、遅かれ早かれわかってしまうことだと腹をくくったらしい。率直に事情を説明しだした。

しかし晶の表情は話のはじめからもう芳しくなく、話が進むにつれて眉間のしわは深くなっていった。

「できるだけのことは、わたくしたちも致しました」

「本当に急で。表向きの理由はともかく、本当の理由がこちらとしてもわからなくて」

「そこだよ！」

晶は自分の椅子に横がけにして、無頼な感じで片肘を椅子の背もたれに預けて言った。

「そこが情けないよあんたたちは！　ずっと聖葉で10年も一緒に寝起きしていて、家族同然なんじゃないの？　それなのに『なぜやめるのか理由がわからない』？　いい加減にしなさいよ、恥ずかしいの」

さほど大きな声ではなかったが、三人はきゅつと首をすくめた。

晶が深いため息をつき、部屋に沈黙が訪れる。

そこへ、

「お話の途中でごめんなさいね」

やわらかい声で高橋妃穂が言った。

彼女も晶と同じく高等部一年生なのだが、資産家で更にはこの学園の創設者の直径子孫ということで、芙蓉寮の生徒代表をつとめている。

「失礼するわ」

妃穂は会釈しながら三人と晶の間を通り抜けた。その手にはタオルとパジャマとその他一式が入った洗面器がある。

「晶、わたくしお先にお風呂いただいてくるわ。皆様どうぞごゆっくりね」

淡く三人に向けて笑うと、妃穂は部屋を出ていく。

そのすぐあとに、自他共に認める妃穂の従者、茨木貴子も続いた。
「いつてら」

その背中を見送りながら晶は思った。

妃穂、心なしか、うきうきしてる？

翌朝、学校指定の鞆を肩からかけて、晶はのろのろと芙蓉寮の階段を降りていた。

頭には昨夜の頼まれごとがある。

彼女たちがあんまり真剣に頼むものだから、結局引き受けることになってしまったのだ。

気が重くないといえば嘘になる。

なにしろ晶はここに来てまだ半年もたっていないのだ。

三人が自分のどこを見てそんなデリケートな頼みごとをもってきたのかも、実を言えばわからない。

だが、晶にもわかることがある。

園子は多分に誇り高い少女であるということ、そして、だからこそ人の意見で自分の決断を容易に変えたりはしないだろうなということだ。

「なに？」

それについて、妃穂はどう思っているんだろう。

並んで階段を降りる妃穂を盗み見てみると、すかさず気づいて返された。

「あーいや、なんでも」

「気が重いんでしょう。わかるわ」

「いやそうなんだけどさ。嬉しそうに言いなさんな」

言うと、妃穂はどこかくすぐられたように身をよじって笑った。

「だって嬉しいんですもの。あつ、あなたが困っているところを見るのが嬉しいわけじゃないわよ」

「わかってるつて！」

園子がここからいなくなるかもしれないことが、妃穂は嬉しいのだ。犬猿の仲の二人だからわからないでもないのだが。

晶はおもむろに右手を上げて、妃穂の頭を後ろからパシツといくぶん強く叩いた。

「な……？」

妃穂は、びっくりしたというよりはきょとんとした顔で叩かれたところを押さえて晶を見返す。

「理由は自分で考えること」

妃穂がなにか口にするより早く晶はそう言って、吹き抜けの螺旋階段を足早に一人だけ降りて行った。

5階建ての芙蓉寮のちょうど中心部に位置するこの螺旋階段は通称『中央螺旋』と呼ばれている。

10年間を共に過ごした仲間たちができないことで、自分にはできることがなにかあるだろうか。

そんなことを考えながら中央螺旋を下っていると、ちょうど一階下に園子がいるのが手すりの間から見えた。

晶はふとまばたきした。

苦々しい顔付きだったのが、園子の様子に氣をとられたせいでもとに戻る。

あきらめた末の凜々しさ。

あきらめた末の頑固さ。そんな言葉が頭をよぎったのだ。

どこが変なのかわからないが、園子の様子がなにかどこかおかしいことはここから見てもわかる。

外見はいつもと変わらない。まっすぐ伸びた背中も、鏡のようにつややかな長い黒髪も。

それでもどこかおかしい。どこか。

「桐生さん」

よく考えるより先に声が出てしまった。園子は晶のほうを振り仰いで、ごく軽く会釈する。

「花、みたい」

「え？」

「しかも大輪」

「ええ？」

なんですって？と聞き返す園子に、晶は走り寄った。

そのまま横に並んで中央螺旋を降りる。

「なにかなあ。桐生さん見てたら、花みたいだって思ったんだよね、今。思ったら口から出ちゃった。なんだろう、大輪の花。薔薇じゃなくて百合でもなくて、牡丹かな」

「あらまあ」

「なんか、自分でも妙な口説き文句みたいだって思うんだけどさー」
晶が言うと、園子はくすつと笑った。

「わたくし、花の中では牡丹が一番好き。わたくしを見てそう思っ
て頂けたなんて嬉しいわ」

「あ、そうなの？ 桐生さんのイメージだよ、百花の王」

「あらあら」

園子はまんざらでもなさそうに目を細めた。
機嫌よく階段を降りる園子に、晶は続ける。

「だけどその花が開花半ばで開くのをやめてしまったところって…
…なんて言つか、惨め？ いや違って、無様？ うーん、でもなく
て」

園子が、ぴくりと眉を持ち上げた。

「咲かない花は朽ち果てるだけっていうのかなあ、うーん、まだちよつと違うなあ」

中央螺旋は校舎へと向かう他の生徒也大勢いる。

晶が園子に言っているのを聞いて、他の生徒たちは何も聞かなかつたふりで視線も合わさず下へとおりていく。その中を、妃穂と茨木も通り過ぎていった。

「えーとうまい言葉が出てこないな。なんだろうね、なんだと思う？」

「なにがおっしゃりたいのかしら」

今や園子の笑みはきれいさっぱり消えている。

「だから、そこが出てこないんだって。あそくだ、痛々しい？」

晶はやつとしつくりきたというように清々しい顔でほんと手を叩く。

「そくだそれだよ。『痛々しい』」

朗らかな晶と対照的に園子の顔からは血の気が引いている。

凄みのあるまなざしで晶を見上げて言った。

「わたくしがそくだと？」

だが晶は気圧される風もなく、平気な顔で返した。

「そうかどうか、実際のところは知らないよ。ただ、あたしの目にはそう見えたよってこと」

ぎりぎりど圧力を感じるほど睨みつける園子と反対に、晶の表情は気が抜けるくらい明るい。

だがその明るい表情のどこか芯のところ、しっかりと園子の視線を受け止めて一歩も引かない、晶の笑顔にはそんなところがあった。「わたくしが、そくだと？」

園子は同じことをもう一回聞いた。

「そうかどうか本当のところはわからないよ。あたしから見えた真実とあなたの胸の中にあるたったひとつのものとは違う。あなたの真実がなんなのか、それはあたしにはわからないんだよ、桐生さん」

園子はふと晶から視線をはずして自分の足元を見る。

まるで階段を降りることに集中しているように真剣に、自分の上靴の先を。

晶の瞳は黒に近いが、本当は深く濃い茶色をしている。その茶色の目は笑っているが、相手と真剣に切り結ぶ覚悟のようなものが浮かんでいた。

厳しいことを確かにあたしは言っている、だからそれに対してあなたが怒っても泣いても凍りついてても、たとえ暴れたってこっちはそれを受け止める用意があるよと、いつでも来いと待ち構える顔だった。

だが園子は晶の顔を見ずに、自分の爪先をじっと見つめて階段を降りている。

一番下まで降りきったところで、園子の足が止まった。晶も一緒に立ち止まる。

「……尾崎さん」

二人の横を、生徒があらかた通り過ぎていったところ、園子が口を開いた。すかさず晶が返す。

「はいな」

「放課後、付き合っていただけ」

オツケオツケ、と晶は二つ返事で答えた。

呼び出されたのは夜の図書室。

晶は寝巻きの上に薄手のカーディガンを羽織って出かけた。

鍵は開けておくとの園子の言葉どおり、図書室の扉はすんなり開いた。

「中から鍵かけて来て下さる？」

園子の声が向こうの方で聞こえる。

言われたとおりにして、晶は真つ暗な図書室の中を電気はつけないまま、声が聞こえたのを頼りに進んでいく。

声は窓際のほうから聞こえた。

書架をひとつひとつ手で触りながら、晶は声のした方へと歩く。

「一体いくつ、校内のスペアキー持ってるの？」

「高等部だけだと、30ちよつとかしら」

窓際の、やけに低い位置から声が聞こえたので晶は首をかしげた。

「そんなにたくさん鍵を持ってて、どこへ行くにも自由自在で、なにどうしてやめたいのさ」

「ひとことで言うと、わたくしが旧家の一人娘だからでしょうか。

そういう家はいろいろあるものなのです」

晶は一番奥の窓際で園子を見つけた。

園子は寝巻きに肩掛けを羽織った姿で、固い絨毯の上に直接体育座りしている。

晶は彼女のすぐ前から暗がりの中の園子を見下ろした。

「それって、ここには解決できないこと？」

「できないこともございませんけど。正直に言って今はわたくし、そこまでの情熱がございません」

「でも以前はあったんでしょ？」

言いながら晶は園子の隣に腰をおろした。壁に背中をつけて前に両足を伸ばす。

「ずっとそうしてきたんでしょ？ あたしはただの風来坊だけどさ、妃穂がたまに親戚からメールもらってはぴりぴりしてる。そういうのを見ると大変なんだなと思うよ。桐生さんも今までずっとそうやってきたんでしょ？ それをなんで今になって？」

薄暗い中、園子は少し笑ったようだった。

右手を動かして体の影になつていた瓶を持ち上げる。

「話は、飲みながらしましょう」

「やっぱ酒かーっ」

あちゃー、と呆れ気味の吐息をもらした晶であつたが、すぐに立ち直って瞳をきらめかせた。

「あたし強いよ？」

「それはよかったこと」

園子は淡々と言って瓶を二人のちょうど真ん中に置いた。

「お誘いして正解でした。手伝ってくださいるわね、これを飲みきるの」

「なに？」

晶が首を伸ばして瓶に顔を近づける。そしてゴードンジンの瓶をぎよつとしたようにわしづかみにして顔の高さまで持ち上げた。

瓶の中身は残り三分の一ほど。

「残しておきたくないし、捨てるのもいや。全部飲んできれいにしてからここを出て行こうと思って」

「悪いこた言わん、やめとき」

「まだありましてよ」

言つて体の影からもう一本出してくる。なんだそつちのは、と晶は目を細めてそつちのラベルを見る。アクアヴィッツ。晶は無言でそ

れも取り上げた。

「体壊すって！」

薄暗い中で発光するように色白な園子の顔には、酔いの色はない。だがもう既に飲んでいるのだろうと晶は思った。

「あたしはもつところ、ワインとかかなと……蒸留系出してきますか……」

「一番の得意分野は日本酒ですが、蒸留酒の方が匂いが残らないので」

「そういう理由で酒を選ばない」

いいの、と言って園子は晶のあぐらの上に大胆に覆いかぶさってジンの瓶を取り返した。

そして晶が驚いたことに、瓶の底に左手を添えてお茶でも飲むかのようにな身を口にした。

「うはー、まじ？」

言いながら晶も、園子にならって瓶から直接アクアヴィッツをあおる。

「寮よりも校内のほうが見つかりづらいの、ご存知？」

「そうかなあ。あたし前に資料室で紀佐先生に見つけたけどなあ。そしてそういう問題じゃないような気も……って言ってるはしからなにその飲み方あつ」

こっこっこっこ。喉が鳴る音も勇ましく、園子は残っていたのを一息に飲み干して、ふっと吐息をもらしてから言った。

「だって量を減らすことがまずは目的ですもの。あなた、無理なら真似しなくてもよろしいのよ」

「無理じゃないけどさあ」

晶は言つて、アクアヴィッツの瓶を持ち上げると軽く揺らした。こちらは瓶の底に4センチばかり残っているのを、弾みをつけて飲み干す。そして絨毯の上からの瓶を置いてから続けた。

「やなんだよなあこういう、酒と喧嘩するみたいにして飲むの」「では、次を」

「ええっ?!」

まだあるのか、と晶が驚いて見つめるなか、園子は立っていつて書架の本を次から次へと抜き出した。一体なにをするのかと晶が見ていると、園子は本の背後詰めてある上げ底用の箱の中から酒瓶を取り出して持ってきたので、晶は両手に顔を埋めた。

「そんなところに……」

しかも新たに出してきた柚子焼酎は真新しくて、封も切られていなかった。晶はげんなりと首を前へ落とした。

「あのさあ、まず隠れて飲むのよそうよ。ちゃんとグラスで、氷を入れて水も入れて。できたらなにかつまみながら」

晶が言うと、園子は『なにを言っているのだ』という顔をした。

「そんな悠長なことをしていたら、いざという時逃げられません」
「だから隠れて飲むのをよせって!」

晶は園子の手から柚子焼酎を取り上げ、手首を軽くねじって封をあけると、一口ずつだからねと念を押してから間に置いた。

「わたくし、初等部からずっと聖葉ですが」

ふと園子が話し出したので晶は彼女のほうを向いた。

切れ長の目を縁取るまつげが、園子がまばたきするたび頬に影を落としている。

「実は、入学前から噂で聞いて知ってはいたのです。高橋さんのこと」

「え、妃穂?」

意外な名前が出てきたので晶は聞き返した。

「そうです。同い年だということも、あの人のご実家の話もあらかじめ知っていました」

早く飲み、というように園子が晶の体を肘でつつく。

晶が黙って一口飲むと、待ちかねていたように園子が瓶を奪っていった。

見た目と裏腹に男らしい飲みっぷりに、晶は半分呆れて半分は本気で感心する。

まだ充分しつかりした口調で園子は続けた。

「尾崎さんには実感のわからない話かもしれませんが、旧家でかつ資産家の家に一人娘として生まれるというのは、なかなか大変なものなのです。兄弟でもいれば別ですが、わたくしも高橋さんも一人っ子という点では一緒ですし。……そもそも似てるんですよ。桐生醸造っておわかり？」

いったんは首を傾げた晶だったが、日本酒の銘柄をいくつかあげられると、ああそれなら知っていると膝を叩いた。

「それひよつとして、桐生さんちで作ってるの？」

「その通りよ。わたくしの実家は桐生醸造。わたくしは、桐生醸造のあととり娘なの」

「てことは、この酒」

「そうです。実家に言えばどんな銘柄でも送ってくれます。自社製品もそうでないのも。勉強のうちだと言って」

「それでか……どうやって手に入れたんだらうって思ってたんだよ、さつきから」

「古い家で、昔から親族中心に家業を回していましたのでね。今でもやはり、外部の人間が口を挟むの……特に経営についてはとても嫌がるの。今うちで働いてくれている方も有能な人なのですけど……でもやはり、その方が中心になって何か新しいことを始めようとすると親族たちに潰されてしまうようで。わたくしが帰れば、また風当たりも違ってくるというのはよくわかっていのですけど」

自嘲気味に言って、園子は膝を抱えなおした。

ずり落ちそうな肩掛けにくるまりながら続ける。

「また両親が二人とも、あまり当主としては適性のない人たちで。家の事は今、おじいさまが見ておいでなのだけど、何分ご高齢だか

ら……」

「帰って来いって？」

「もう3年前から、折にふれて言われています。帰って来て、地元の女子校に通えって」

妃穂のことを知った時、園子はとても嬉しかった。

自分と同じ思いをしている人がもう一人いる。

きつと仲良くなれる、互いにわかりあって、助けあって、この難しい人生を歩んでいく同志になれる。

そう思っていたという内容のことを、園子は口ごもりながら、ためらいながら、ときに言い訳をまじえながら時間をかけて話した。

ただ高橋妃穂という人は、自分が思っていたような人ではなかったと園子は言う。

「単にお嬢様育ちの馬鹿な女の子なら、それはそれでよろしい」
いくぶん舌が滑らかになったのは、柚子焼酎の瓶が半分ほどからになった頃だった。

「それならかえって諦めもつくし、利用のしがいもあるというもの。ただあの人の腹立たしいところは、決して頭が悪いわけではないんです！」

じつと聞き入っていたら、また肘でつつかれた。
早く飲んでこちらに回せということだ。

「あの人はね、やる気がないんです。それに中途半端！」
酔いではなく憤りで、園子の目の下が赤くなる。

「いいですか、尾崎さん」

「はい」

「わたくしたちは、生まれてただか10数年。未熟なら未熟で結構です。あがくならあがいても結構です。だけど」

聖葉の図書室は一階の北側にある。

晶たちがもたれている窓際の壁、その窓のすぐ向こうには芝生を挟んで深い森がある。

その森の枝々を通して白い月の光が差し込み、並んで座っている二人の手元を照らしていた。

園子は体育座りの膝の上に置いた指を祈りの形に組んで、爪の色が白く変わるくらい力を入れて言う。

「わたくしが思うのはね。未熟なら全力で未熟であれということなの。あがくなら全力であがけということなの。そうすることでは道は開かれないのだし」

晶は首だけ動かしてうなずいた。

「出し惜しみしていると、出し惜しみしたなりの成長具合になるものよ。それを積み重ねていくと、結局中途半端な人間が出来上がるのだわ、あの人みたいな！」

「うー……ん」

晶が低く曖昧にうなづいていると、園子がじろりと視線をくれてよこした。

「無理にあいづちうたなくてよろしい」

「はい」

「もっと怖いのはね。……尾崎さん、あなたならわかりでしょ」

「えっ、なんだろう」

「それが続いていると、出し惜しみ癖がつくということなの」

「あーあーあーあー」

大きく何度も首を縦に振りながら言った晶に、園子が畳み掛けた。

「ね、わかるでしょう」

「うん、わかる。それはわかるな」

ずっと怒らずにいると怒り方を忘れるように、長いこと使わずにいると筋肉も衰えるように、発揮されないままの能力もやはり衰える。

そしていつしか、本当に必要なときに底力を発揮しようと思っても
できなくなっていることに気づく。園子が言っているのはそういう
ことで、晶もその重要性や怖さを知っていた。

常に全力でことに当たること。自分の力を出し尽くすこと。出し惜
しみしないこと。

そうすることしか、本気の願いは叶わない。
それを、この二人はよく知っていた。

鍵バトルって覚えていますか、と園子が聞いた。

「尾崎さんは当時ここへ来たばかりであまり印象に残ってはいないかもしれませんが、中部部や高等部に新しくあがった時、新一年生の間で行われる人気争いというか、勢力争いというか、ま……そんなようなものです」

「なんとなく気づいてはいたよ。あなたと妃穂の二人で戦ったんだっけ？」

「そうです。その鍵を保持している先輩たちから、いかにして期限内に鍵を譲っていただくかというゲームなのです。これで私たちは通算3回、やりあいました」

「三回？」

「初等部一年の時と、中等部一年の時と、この四月と。実はわたくし、前の二回は高橋さんに完敗しているのです」

「完敗。あなたが」

そう、と園子はうなずいた。

「あの人、実は凄いのよ」

「ほう？」

「わたくしはわたくしで自信があって挑んでいるのに、あんな、縁側で猫抱いて日向ぼっこしているばあさんみたいにのんびりした人に、いつもいつも叶わないの」

「あとう、せめて『猫』の方にとえるとかですね……」

園子は晶の呟きを無視して言う。

「でも今回はね、負けたのは同じでも僅差だったの。わたくしのお友だちは単純にそれを喜んでいるけど、わたくしはそんなふうには思えなかった。歯痒くて、じれったくて、しつかりしなさいと言いたい反面、なんだかがっかりもしていて。気が抜けたというより、

失望したのよ」

晶は沈黙で先を促した。園子は続ける。

「わたくしに負けそうになって今度こそ奮起するのかと思ったら、今回もまた前の二回と同じ！ バトルの期間が終わったらのほほんとなつてしまつて、生きてるんだか死んでるんだかわからなくて！」

晶が黙つて聞いていると、園子は大きなため息をついてから続けた。

「出し惜しみ。あの人は、まさしくそれ。高橋家の当主としてのことだつて同じよ。どんなことでもそうですけど、逃げ続けていると結局悪いほう、悪いほうへと進んでいくものです。あの人は、当主として家を率いていく覚悟も決められないくせに、分家筋の大人たちの言いなりになるのもやっぱり嫌なんですよ。それからもうひとつ、腹立たしいのは茨木貴子ですよ」

「茨木？」

「そうです。一番近くで支える立場でありながら、わざわざ主人を甘やかして――」

「はははは」

一にも二にも妃穂の世話が最優先で、自分のこともその他の人間のこととも後回しである茨木のことを思い出して、晶は苦笑した。

同室という立場で観察していると、そういういつもいつも甘やかし放題というわけでもないのだが、園子の目からはそう見えるのだなと思つた。

「そもそもあの人があんなに中途半端な原因のひとつは、茨木さんにあると思いますよ」

高橋家の次期当主になることが確定していながら、いつまでたつても腹が据わっていないように思えるところが、いかにも責任逃れしたがつているようで大嫌いなのだと、園子のはつきり言い切つた。

「えーとあの、ひょつとしてあなたたちが仲悪い原因で、それでしよつか」

「そうよ」

これも園子は言い切った。

この春聖葉に来た晶にはこの二人の過去の確執はわからないが、ことあるごとに意識しあい、冷たい火花を飛ばしていることは知っている。

彼女たちは、とりあえず表面上は取り繕うということすらせず、廊下などで行き会うつんとあごをもたげて顔をそむけあうのだ。

そしてまわりの少女たちももはやそれが当たり前で、それはそれで日常の風景だとみなしている。

それは初等部のころから続いている犬猿の仲なのだと聞いていたが、そんなところに根があるとは驚きだった。

「え、つてことは桐生さん、初等部1年の頃にはもう、今みたいなこと考えてたつてこと？」

「そうです。まあここまできっちり言語化できていたわけではありませんけど、気持ちの部分は変わっておりませんね」

「ずいぶん大人びてたんだねえ」

「そうね……今にして思うと、そうかもしれないわね」

園子は視線を情報にさまよわせて我が身を振り返った。

「確かに、年の割には早熟な子供だったかもしれませんが。ずいぶん早くから自分が桐生家の次期当主なのだと知っていたし、それにふさわしくあるうと決めていました。権利を行使できる立場にいることと、義務を果たさなければならぬことはイコールだという自覚があったので」

「できすぎてて怖いよ、そんな子ども。あたしがそのくらいの頃ってどうだったかなあ……。絵描きだった父のまわりで、その土地の子どもらと一緒に転げまわって遊んでたよ」

「そついうのも、楽しそうなこと」

園子は言って、本当にやさしく目を細めた。

そして次の瞬間にはそれを一転させて、厳しく眉を吊り上げた。

「ですから、わたくしは高橋さんのあの、いつまでたっても腹を据えないところが嫌いです。見ていて苛々します」

え、と晶はそれを聞いて思ったことがあった。

もしや。まさか。いやでも。

心の中で一度溜めてからおそろおそろ口にする。

「もしかして、やめる理由、それ？」

返事はない。

だが返事がないことがまさに真実をついた証拠のような気がして、晶はもう一度聞いた。

「いつまでたっても妃穂が中途半端だから、それが歯がゆいからやめるの？」

やはり、返事はない。

園子はうつむいており、長いまつすぐな髪がその横顔を隠している。表情は見えなかった。

「もしかして、待ってたの？」

「……だって！」

長い沈黙の末に、園子は吐き出すように言った。

膝の上に上体をつ伏して、顔を伏せた格好のままで言う。

「だって、他に、もう、ここでしか手に入れられないものなんてないし」

かすれた声で途切れ途切れに言うのを聞きながら晶は思った。

妃穂と会っのをものすごく楽しみにしていたんだ。そして、期待も

していたんだ。

妃穂がいつまでたっても自分の立ち位置を決めないことに焦っていたけど、次期当主として生きることがどんなに大変なことなのかも実感として知っていたから、妃穂が自分自身で決めるのを待っていたのだ。ずっと。

「初等部から数えて10年です。10年待てばもう充分でしょう」

園子は膝の上に突っ伏したまま手探りで酒瓶をつかむと、くつと一口あおってからまたすぐ顔を伏せた。晶が表情を盗み見る暇もなかった。

「だって、もう、疲れた。ずっと一人で」

「一人じゃないでしょ。桐生さん、友だち多いじゃない」

言っと、顔もあげないまま園子が左手をひらめかせて晶の体をぶつた。

「弱音も野望も両方ぶつけられる人なんて、誰もいません」

「あたしは？」

「え」

「あたしじゃだめ？」

「なんですって」

間の抜けた声を園子は出した。

と同時に、伏せていた顔をほんの少し持ち上げる。

その顔が、ゼンマイ仕掛けの人形のようにゆっくり横を向く。

晶の方を向いたその顔は、思ってもいなかったことを言われたというように無防備だった。

「だって、あなたは、高橋さんの」

園子はどこか力なく言う。そこへ、すかさず晶は畳み掛けた。

「聖葉のルールでは、妃穂と親密だと、もう他の誰とも仲良くなることはできないの？」

そついう、わけでは、ございませんが。

迷いながらためらいながら園子はつぶやく。晶は続けた。

「あたしが妃穂と特別親しいとみなされてるのは知ってるよ。その通りだよ。だけど妃穂と友達のままであなたの支えになることはできないの？」

園子はじつと晶の顔を見つめている。

けげんそうだった表情はゆっくり変化して、いつしか真顔になっていた。

「あたしじゃ桐生さんのいろいろな事情をわかってあげられなくて物足りないかもしれないけど、もうしばらく辛抱して」

「しばらく？　っていつ？」

「いつってはっきりとは言えないけど。いて」

園子が肘で強く押したのだった。晶は続ける。

「だってそれはさ、それこそあたしは妃穂と会って間もないし。その辺かかる時間は、はかりかねますよ。でもあたしの勘だけど、そう遠い話ではないような気がする。妃穂って、桐生さんが思ってるほど、閉じた感じしないもん」

「だからって」

「大丈夫。そのうち、覚醒するから」

「そのうちってそんな、あてどもない話」

園子は薄く眉間を寄せて言った。

だが険のあるというよりは、気安くむくれているという感じだった。

「約束する。妃穂は必ず覚悟を決める。そしてあなたと対等に語り

合える相手になる。必ずなる。その時きつと思つよ。あの時あきらめなくてよかつたつて」

小さく園子が微笑んだ。

「やめるの、やめようよ」

「……また、あなたはストレートなおつしやりようを」

「だってもう、やめる理由がなくなっちゃったじゃない。今日明日というわけにはいかないけど、妃穂は変わるよ、約束する。そしてそれまでの間、あなたにはあたしがいる」

「だって……」

「なに？」

「だって、もう書類だって支度できてしまっているし……」

「それは、桐生さんがやめるって言ったから話が進んじやつたんでしよう。やつぱりやめないって言えば簡単にひるがえるよ」

園子は自分のあごに指をあててしばらく考えていたが、やがてからになって転がっている酒瓶を指差した。ゆっくり言葉を選ぶ。

「あなたはこのこと」

「んん？」

晶が焼酎の瓶を手にもって、飲み口をくわえながら鼻声で聞き返す。

「知つても、怒つたり眉をひそめたりしないと思いました」

「まあ、しないね」

「言いつけたりもなさらないのではと」

「しないね」

晶が瓶を床に置いて、園子はもう待ち構えていたように奪い取つたりしなかった。両腕で膝を抱えて静かに言う。

「でも叱るかとは思つた。なぜ叱らないのかそれが不思議で」

多少の規則違反に目くじらを立てて怒るほど、晶は堅苦しい生徒ではない。

そこは園子も知っている。

だがその生徒が明らかに自分の義務を果たしていないときや、不貞腐れて卑屈な態度をとったりしていると、晶は即座に的確に、叱る。

自分の今回の飲酒は明らかにやけっぱちだ。それは自分でもわかっている。だから少々不思議に思って聞いたのだが、

「んーまあ」

晶は首の後ろ側に手を当てて、ちよつと下を向いた。

「自分を信じて努力している人間は後押ししたくなるし、好ましいし。そういう人間が多少馬鹿なこととしてたとしても、あたしは叱る気にはなれない。それで嫌いになったりもしないし」

園子が黙っていると、晶は続けた。

「あとついでに言うと、大した奴だなと思って内心認めてる人間のこととは、なかなか叱れなかったり、することもあつたりなかったり

……」

まあ、と園子はつぶやいた。

「やだ、どうしましょう」

園子は少し驚いた顔のまま、ぽんと手の平で晶を叩いた。そこにいることを確かめるように。

晶はされるがままになっている。

ぽん、ぽん。園子は続けて晶の体を叩く。はじめのうちはごく軽く、そして次第に力強く。

「どうしましょう。わたくし、まさかそんなに手放しで褒めてくださるものとは思っていなかったわ。それ、褒めて下さってるのよね？」

「褒めてるよ？」

にこお。園子の顔が、嬉しくて仕方ないというようにゆるむ。

ぽんぽんだった手の動きにだんだんスナップが加わり、ばしばしに近い音になり始めたが、それでもまだ晶はしたいようにさせていた。

「もともと、頑張ってる女の子ってあたし好きだし。あと決定的にいいなと思ったのはさ。桐生さんで黙々と頑張るじゃない？ 愚痴ったり文句言ったりしながら嫌そうに何かするんじゃない？ 淡々と凜々しくやるべきことをやるじゃない。あたしはそこが好きなのだから妃穂との確執はおいておいて、できたら仲良くなりたかったんだよね」

「ウエルカム、尾崎さん。喜んで。まったく問題なくってよ」

「ただ酒の飲み方についてはちょっとたしなめたつもりあるよ。さすがにこれはね。……って、黙ってやらせておきゃ、痛い！」

「ほほほほ」

ほほほじゃねー、と晶は園子の手首をつかんで大人しくさせた。

「桐生さんで、意外と馬鹿力」

自分で言ってしまったから、晶ははてと首をかしげた。

ひょっとしてこの人、今ごろ酔いがまわって……？

そう思ってみればこの肩の力の抜け具合、歯止めがきいていなさそうな笑い方、酔っ払い特有のものだ。

今更かい、と思いながら晶は園子を正気づかせるように、手首をつかむ手に力をこめた。

「あのねえ桐生さん、もしね。あなたがこの先あんまり妙なことしたらその時は叱る。言っとくけど、あたしが叱ると怖いよ。こら聞いている？」

聞いてましてよ、と機嫌よく笑う顔にはしまりが無い。

だめだこれは、と晶は園子の手を離した。

焼酎の瓶に手を伸ばして、きつく蓋を閉める。

「もう今日はおしまい」

えーとどこから出したんだったかな、と記憶をたぐりながら酒瓶を元の場所に戻す晶を、園子はなんとも言わずに見ていた。

「続きはまた、今度ね」

わかったの？返事は？とにらむ晶に、園子はふふふと含み笑いで返した。

晶はげんなりした顔になる。だから、ふふふじゃないって。

「これからは、いいことや嬉しいことがあったときだけ飲むこと。あたしも付き合うから。約束して」

その時。

ガチリと音がした。カチャカチャと金属と金属がこすれあう音。扉の鍵を、外から舎監の紀佐先生が開けようとしている音だと気づいて、二人は一瞬で真顔になった。ことに園子は青ざめている。

「いやだ、中まで入ってくるなんて今まで一度も」

「大丈夫、窓から逃げるよ。早く空き瓶隠して」

「その、つもりですが……」

園子が懸命に掴まり立ちしようとしているのを見て、晶がジンとアクアヴィッツの瓶を引っつかんだ。

「これ、どこ？」

「岡本かの子の全集の後ろ……」

「誰、岡本かの子って」

眉間にしわを寄せて聞き返す晶に、園子が舌打ちした。

「岡本太郎のお母様よ、そこじゃない文庫の棚！ アクアヴィッツはトルストイの後ろ！」

「だって知らないもん！」

「無知！」

「偉そうな！ 足腰も立たないくせに！」

紀佐珠子が図書室に入った時、そこには誰もいなかった。だが人がついさっきまでいた気配というのは、思いのほかはつきりわかるものだ。

誰かいたのだな、と思いながら紀佐はゆっくり歩いて行って窓際の通路で立ち止まった。

そこは、つい今まで晶と園子が座っていた場所だった。

窓の鍵がひとつだけ閉まっていらないのを見つけて紀佐は手を伸ばす。

「しーっ」

そこに、小さな声が聞こえた。紀佐は手を止める。

外の、芝生の植え込みのあたりから声は聞こえた。

少女二人が柔らかな芝生を踏みしだきながら、「気持ちが悪いわ」

だの、「我慢！」だのと抑えた声で言い合いながら遠ざかっていくのが聞こえる。

「いや、吐く……」

「ダメ！」

桐生園子と尾崎晶の声だと知って、紀佐はちょっと驚いたように眉をあげた。

だが、それだけだった。

紀佐の手がかちゃんと鍵を閉める。

ぎりぎりで現行犯ではないから今回は見逃すことにしようと思いいながら、紀佐は図書室を出た。

そして、何事もなかったかのように見回りを再開した。

「いや、せっかくだけどあたしはもう……」

晶のげんなりした声をものともせず、机の上にはきれいにラッピングされた袋がふたつ、ほとんど同時に乗せられた。

「まあ尾崎さん、そうおっしゃらずに」
「そうですわ」

満面の笑み。中身は見なくてもわかっている。手作りのバスケットだ。

朝の教室で、晶は渋い顔で自分の席についている。

その机の上にはあとひとつでも乗せたら雪崩が置きそうなほど大量の箱だの袋だのが積み上がっている。

色とりどりのリボンやクレープ紙をまとった贈り物は机の上だけにとどまらない。机の中にもぎっしりだ。

「教科書が入らない……」

晶はぼやく。

「まあ尾崎さんったら」

「だって、これは気持ちでございますから」

きつと召し上がってねと言って二人が去ったのに入れ替わるように、今度は新たに三人来たので、晶はとっさに片手を突き出して遮った。

「だからもういいって!」

聖葉ではなにかと言うと、気持ちを菓子に乘せて伝える習慣がある。

仲直りの時はカラムル、謝罪は冷菓、感謝はビスケット。

それはわかる。そうした習慣は美しいと思う。気持ちも嬉しい。問題なのは量だった。

結局園子は聖葉に残ることにした。

その知らせは次の日の朝にはもう学内に知れ渡り、その日の調理室は消灯時間ぎりぎりまで人でいっぱいだった。

「だけど決めたのはさー、桐生さんじゃん」

なにもこんなにくれなくても、と贈り物の山を見ながら言う晶に妃穂が言った。

「説得できてしまうなんて……誤算だったわ」

「残念そうに言うのよしなさい。妃穂あんたさ」

「なあに」

ほっとしたんじゃないの、今年の四月の鍵バトルが終わった時？晶はそう聞こうかと思った。

今回園子が退学するかもしれないと思ったときもそうだ。

長年人気と権力を二分してきた相手がいなくなることが嬉しかったのじゃなくて、どちらかと言うと、もう争う必要がなくなるからほっとしたのじゃないか？

そして園子が敵視しているのは妃穂個人ではなく、妃穂のそうした生ぬるい事なかれ主義の部分なのではないか。

今の晶にはそう思えた。

「なによ、晶。どうかして？」

「なんでもないよ」

だが晶はそこは問い詰めなかった。

妃穂の性格を形作っている影の部分は、根が深い。そこをどうにかするには時間が必要だ。

そして、今はその時ではないと思ったからだった。

「……ハイそこ置いていかない。受け取らないぞ！」

晶はそうっと包みを置いていこうとする三人に指を突きつけた。

「見りゃわかるでしょう、飽和状態です。物理的に無理。……つて、言ってるそばから鞆に入れるのやめなさい！」
がたんと晶が立ち上がるのと、三人がきやあきやあ笑いさざめきながら教室から走り出していくのが同時だった。

嬉しそうに、スカートの裾をひらめかせながら。

4頁（後書き）

相変わらず聖葉のお嬢さんたちはお菓子を贈りあっているようで、この習慣は健在です。

晶「先生、差し入れです（テーブルへクッキーざらざら）」

紀佐「……（半眼）」

晶「これ、おにぎりとか肩たたき券とかにかえてもらっちゃだめなんですかねエ」

紀佐「（無言でお菓子ごと晶を舎監室の外へ押し出し）」

晶の母は心やさしく体の弱い人でしたが、妃穂の母は少々問題のある人でした。そしてその問題の為に妃穂と父の間には溝ができ、彼女が聖葉に入る直接の原因にもなったのですが。

次は妃穂と茨木、そして晶が子どもの頃の話。

「薔薇園」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2743i/>

焰

2010年10月8日23時26分発行